

高橋玄洋君のこと

玄洋君とは長い間苦勞を共にした。わたしが責任を持つている日本演劇協会に、勤勞奉仕みたいなかたちで働いてくれ、その間せつせと戯曲の勉強をしていた。終戦後から続けていた戯曲研究会のメンバーとしても光っていた。この芽は伸びる芽だと思つたがNETが出来たのを機会に協会をやめて入社したら、果せるかなぐんぐんと伸びて、社内ライターとしても群を抜き、ついに上司にすすめられて独立の作家生活に入ることになつてしまつた。長年の努力と天分がモノを言つたのだ。

玄洋という男はいわゆる外柔内剛というやつで、口数は少いがシンに極めて強いものを持つている。それが作品の中で強く叫ぶ。しかしそれはちつとも暗いものじゃなく、生地である瀬戸内海沿岸の明るい風色を身につけ、明るいヒューマニズムに貫かれてゐる。それが万人の胸を打つのだ。まだまだ伸びる木だから、質を良くして儼然たる巨木になつてほしい。その可能性をわたしは信じてゐる。

昭和三十九年三月三十一日 北条 秀司